

江戸時代に、京都と下関を結ぶ山陽道を、広島藩では「西国街道」と呼んでいました。当時の五街道(東海道、中山道、甲州街道、日光道中、奥州道中)に次ぐ規模を誇り、道幅は2間半(約4.5メートル)ありました。今も、往時をしのぶ歴史的な建造物が点在しています。



**小己斐明神**  
小己斐明神は、平清盛が厳島神社を建立した際に鈴ヶ峰から木を切り出し、刻印を打ち、いかだを組み、木材を送り出したことから「刻印の明神」と呼ばれていました。寛政3年(1791年)、己斐村の人が土地を造成し、己斐旭山神社の分神を祀ったことから、「小己斐明神」と呼ばれるようになりました。今は周囲が埋め立てられ、公園になりましたが、海とつながり、満ち干があります。鳥居は厳島に向いています。

小泉本店は、江戸時代の天保年間(1829年~1847年)に創業された造り酒屋。今も、厳島神社のお神酒をはじめ、清酒(日本酒)を造っています。屋根の上の「煙出し」など特徴的な造りの母屋から昔の街道の面影が見えます。

古江の山手、福蔵寺の裏にある五輪塔は源範頼の墓と伝えられています。源範頼は、源義朝の六男で、頼朝が兄、義経が弟にあたります。墓については諸説あり、福蔵寺もその一つです。

草津港へ通じる道と西国街道へ通じる道との分かれ目にあった「お休み所」です。今はパン屋さんになっていますが、手作りのよもぎ餅やあん餅も売られており、昔の名残をとどめています。店内には昭和6年の別れの茶屋付近が描かれた絵が飾ってあります。

**西区の神楽**

**十二神祇神楽** 十二神祇神楽とは、12の演目で構成されるおっとりした舞が特徴の神楽です。井口と古江で継承されており、子どもたちが舞います。幕間に繰り広げられる吹き火(花火)も人々を魅了します。



**井口神楽**  
天明5年(1785年)、井口村(現在の西区井口地区)では、疫病や飢饉が続き、大きな被害を受けました。村人は、大歳神社に疫病払いや五穀豊穡を祈願して神楽を奉納したと伝えられています。



**古江神楽**  
古江に神楽が伝わったのは、江戸時代ではないかと言われています。昭和20年(1945年)から昭和60年(1985年)ごろまでは、口上を伝える台本はなく、古老の話を聞き取りながら練習をしていました。昭和62年(1987年)、長老が土井忠生広島大学名誉教授に、口上を書いたものを渡していたのを基に、土井教授が精査して現在の台本ができました。

**茶道 上田宗箇流**



地方都市では数少ない茶道の家元が西国街道沿いにあります。桃山時代を代表する武将茶人の一人であった「上田宗箇」を流祖とし、400年以上この広島の地で武家茶道文化を継承してきました。静心の充実、今を一生懸命生きるという戦国武将の心の在り方は、今日にも通じるものであり、16代目となる現代においても宗箇の茶を大切に守り伝えています。